

恋人がいない人への評価とその人の恋人を求める願望の有無との関連

高田 咲季 (滋賀県立大学 大学院人間文化学研究所, os35stakada@cc.usp.ac.jp)

後藤 崇志 (滋賀県立大学 人間文化学部, g.ikuyakat@gmail.com)

The relationship between the evaluation for those who do not have a romantic partner and their desire for a romantic relationship

Saki Takada (Graduate School of Human Cultures, The University of Shiga Prefecture, Japan)

Takayuki Goto (School of Human Cultures, The University of Shiga Prefecture, Japan)

Abstract

We examined the stereotypical images of those who do not have a romantic partner with considering their desire for a romantic relationship. We revealed that those who had neither a romantic partner nor a desire for a romantic relationship were evaluated the most negatively in the sociality dimension. We also revealed that they were evaluated negatively in the positive trait dimension, while those who do not have a romantic partner but have a desire for were not. Furthermore, we showed that they were evaluated negatively in the negative trait dimension by those who had less egalitarian sex role attitudes. We discussed the possibility that stereotypes about those who do not have a romantic partner were involved with the internalization of a “normative” life course.

Key words

stereotype, singlism, romantic relationship, SESRA, right-wing authoritarianism

1. 問題

現代社会において、恋愛や結婚のパートナーがいない人は否定的に評価される傾向にある。恋愛や結婚のパートナーがいない人に対する否定的な偏見はシングリズム (Singlism) と呼ばれ、雇用や保険の契約などにも影響しうるものとして注目されている (DePaulo & Morris, 2006)。恋愛や結婚に関するイメージは社会・文化に依存する可能性があるものの、本邦においても、パートナーがいない人は否定的な評価を抱かれやすいことが示されている (山本・山本, 2018; 若尾, 2003)。現代日本においても、パートナーがいない人はなぜ否定的な評価を受けやすいのかを検討することは、恋愛・結婚の自由を担保し、多様なライフコースを包摂する社会を構築する上で重要であると考えられる。本研究では、規範的とされる生き方からの逸脱が、パートナーのいない人への否定的な評価を引き起こしている可能性について、被評価者が持つ恋人を求める願望の有無とステレオタイプとの関連から検討する。

1.1 「パートナーがいない人」へのステレオタイプ

「恋人がいない人」のように、その人の属する社会的カテゴリに結びついたイメージはステレオタイプと呼ばれる。ステレオタイプ自体は個人が特定の社会的カテゴリに対して持っているイメージであり、知識として持つ限りにおいては問題とはならない。しかし、人は他者の印象や特性を判断する際に、ステレオタイプとして持つ知識を利用しやすいことが知られている。特に、出会って間もない他者に対してはステレオタイプに基づいた判断

を下しやすい傾向にある (e.g., Fiske & Neuberg, 1990)。一度適用されたステレオタイプの判断を更新することは難しく、そうした判断が誤っていたり、否定的な印象と結びついていたりする場合には、偏見・差別といった社会問題として顕現化することもある。

人がさまざまな対象に対してどのようなステレオタイプを形成しているかを考える上で、ステレオタイプ内容モデルの分類軸は示唆的である (Fiske, Cuddy, & Glick, 2006)。ステレオタイプ内容モデルでは、多くの社会的カテゴリに対するステレオタイプは社会的、友好、信頼といった共同性に関わる暖かさイメージと、有能、知的といった作動性に関わる有能さイメージの2つの軸から整理できるとされている。例えば、男性は有能さが高く、暖かさが低いカテゴリとして、女性は暖かさが高く、有能さが低いカテゴリとして捉えられやすいと位置付けられる。

パートナーがいない人に対するステレオタイプ研究においても、ステレオタイプ内容モデルの2つの軸に近い要素が見出されている。例えば、Slonim, Gur-Yaish, and Katz (2015) は複数の形容詞を用いて未婚者と既婚者のイメージの違いを検討しているが、因子分析の結果からは暖かさに対応するような *warmth and sociability*、有能さに対応するような *success and potency* の2つと、置かれた状況のイメージを表す *loneliness and misery* という3つの因子が見出されている。その上で、未婚者は既婚者に比べて、*warmth and sociability* が低く、*loneliness and misery* が高く評価されやすいという結果が報告されている。研究によって次元数や概念の異同はあるものの、他の研究 (Hertel, Schütz, DePaulo, Morris, & Stucke, 2007; Morris & Osburn, 2016) においても概ね類似した因子に基づいて検討されている。本邦においても高田・後藤 (2022) は恋人がいない人は恋人がいる人に比べて、外交的、明るいといった

社会性イメージが低く、退屈、孤独といった否定的イメージが高いという結果が得られたことを報告している。

1.2 規範的なライフコースからの逸脱によるステレオタイプ評価

パートナーがいない人が否定的なステレオタイプを抱かれやすい理由として、規範的なライフコースからの逸脱に対して否定的な反応が引き起こされるためというものがある。荒牧 (2019) によると、2018 年に行われた社会調査の中で、「結婚するのが当然」と回答した者は 27%、「しなくてよい」と回答したのが 68% だったことが報告されており、現代日本においては結婚・恋愛は必ずしもしなくてはならないものとは捉えられていないことがうかがえる。一方で、内閣府 (2014) によれば 20 代の 60% 程度が恋人を求めていることが報告されており、恋人がいることが当然であると捉えているような若年層は多いことも示されている (若尾, 2003)。結婚・恋愛のパートナーを得ることが規範的と捉えられている中で、パートナーを持たずに規範的な流れから逸脱しようとしているように見えることが否定的な評価につながっている可能性が考えられる。

実際に、いくつかの社会的カテゴリにおいては規範的な生き方からの逸脱がより否定的な評価につながりうることを示されている。例えば、Slonim et al. (2015) では、自ら進んで独身になった人は、より否定的な評価を受けやすいことが示されている。同様に、結婚を望まない人 (Morris & Osburn, 2016) や、意図的に子どもを持たない人 (Iverson, Lindsay, & MacInnis, 2020) は、非意図的な理由でそうした状況にある人よりも否定的な評価を受けやすいことも示されている。

以上の研究を踏まえると、単純にパートナーがいない人よりも、意図的な理由によってパートナーを持たない人は、規範的な生き方から逸脱しているとみられ、否定的に評価される可能性が考えられる。実際に、独身者・未婚者・子どもの有無においては願望の有無が評価と関連することが示されているが、恋人の有無についても同様の結果が得られるかは検討されていない。言い換えると、同じように恋人がいない人の中で、恋人を持ちたいという願望のない者の方が、願望のある者よりも否定的なステレオタイプを抱かれることが予測されるが、直接的には検討されていないことになる。

恋人、すなわち恋愛上のパートナーの有無と、結婚のパートナーの有無には類似点も多いが、異なる点もある。例えば、結婚のパートナーがいることは、異性婚の場合、子孫を残すことにつながりうると推測されるが、恋愛のパートナーがいることは必ずしも子孫を残すこととはつながらない。このことと関連して、MacInnis and Hodson (2017) は、意図的に肉食主義をとっている人は否定的に評価されやすいことを示しているが、その動機によって評価は異なることを示している。具体的には、健康上の理由や、環境保全を理由として肉食主義を選択している人よりも、動物の権利のために肉食主義を選択している

人の方が否定的に評価されやすかったことが報告されている。この結果は、ある社会カテゴリに属する人の選択が規範の逸脱だけでなく、既存の社会システムを変えようとしているとみなされることが、より大きな否定的評価につながることを示唆する。これを踏まえると、結婚のパートナーを持たないことは新しい世代を生み出さないという社会システムの変化を予期させうる一方で、恋愛のパートナーを持たないということはこうした社会システムの変化を必ずしも予期させないという点が異なっており、願望の有無が否定的な評価につながるかは検討の余地があると考えられる。

1.3 本研究の目的

本研究では、恋愛のパートナーを求める願望の有無が、恋人を持たない人へのステレオタイプに影響するかについて検討を行うこととした。規範的なライフコースからの逸脱が、恋人のいない人への否定的なステレオタイプにつながっているのであれば、恋愛のパートナーを持ちたいという願望のない人はより否定的なステレオタイプを抱かれやすいと予想される。

加えて、本研究では、右翼権威主義と平等的性役割態度の 2 つの個人差と、これらの恋人を持たない人へのステレオタイプとの関連についても検討する。先行研究においては、こうした現状の社会システムへの賛否に関わる個人差が規範的な生き方から逸脱する人へのステレオタイプに関連することが示されている (e.g., Iverson et al., 2020; MacInnis & Hodson, 2017)。そこで、本研究においてもこれらの個人差が、恋人を持たない人へのステレオタイプに関連する可能性があると考え、探索的に検討を行った。

2. 方法

2.1 調査回答者

Crowdworks の登録者に調査協力の依頼を募り、416 名から回答が得られた。そのうち、調査の説明・項目の記述を読み飛ばしていると思われる者を除いた 328 名 (男性 93 名、女性 230 名、無回答 5 名：平均年齢 25.04 歳、 $SD = 3.32$) からの回答を分析に用いた。

2.2 調査項目

2.2.1 恋人の有無および恋人を求める願望の有無によるステレオタイプ評価

「恋人がいる人」「恋人がいないが、ほしいと思っている人」「恋人がおらず、ほしいと思わない人」の 3 つの対象について、どのようなステレオタイプの評価が抱かれているかを尋ねた。それぞれの対象のイメージについて、高田・後藤 (2022) が、恋人がいる人・いない人の特性に関するステレオタイプを調査するために作成した項目を用いた。項目の構成は否定的イメージ 6 項目 (退屈である、つまらないと思う、孤独だ、暗い性格だ、性格が悪い、魅力が欠けている)、社会性イメージ 4 項目 (外交的である、明るい人だ、自分に自信を持っている、積

極的だ)、肯定的性格イメージ4項目(優しい、素直である、良い人だ、真面目である)の計14項目であった。調査回答者は、それぞれの項目について、対象のイメージにあてはまるかどうかを、「1. あてはまる」～「5. あてはまらない」の5段階で回答した。なお、3つの対象の提示順序は回答者間でカウンターバランスをとった。

2.2.2 日本語版右翼権威主義

高野・高・野村(2020)の作成した日本語版右翼権威主義尺度を使用した。本尺度は、権威主義15項目(例、日本が危機を乗り越える唯一の方法は、伝統的な価値観に立ち戻り、力強いリーダーに権力を握らせ、悪事を働く連中を黙らせることである)と、因習主義15項目(例、同性愛者やフェミニストは、伝統的家族観に立ち向かうほどの勇気をもっていることを賞賛されるべきだ(逆転))の計30項目から構成される。高野他(2020)に合わせて、調査回答者はそれぞれの項目が自身の考えにあてはまるかどうかを「-4. まったく同意しない」～「+4. とても強く同意する」の9段階で回答を求め、分析の際に得られた回答を1～9の9段階になるように変換を行った。

2.2.3 平等主義的性役割態度スケール

鈴木(1994)の作成した平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)を使用した。本尺度は「女性は、家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いたほうがよい」「女性の居べき場所は家庭であり、男性の居べき場所は職場である」などの15項目から構成される。調査回答者はそれぞれの項目が自身の考えにあてはまるかどうかを、「1. あてはまる」～「5. あてはまらない」の5段階で回答した。

以上に加え、回答者個人に関する項目として、年齢、性別、恋人や配偶者の有無についても回答を求めた。

3. 結果

3.1 対象によるイメージの違い

対象ごとに、否定的イメージ、社会性イメージ、肯定的性格イメージのそれぞれの項目への回答の加算平均をイメージ得点として求めた。対象ごとの各イメージ得点の平均値と標準誤差は図1に報告している。それぞれのイメージ得点について、対象による差が見られるかを検討すべく、イメージ得点ごとに対象(3水準:「恋人がいる人」「恋人がいないが、ほしいと思っている人」「恋人がおらず、ほしいと思わない人」)で比較する一要因分散分析をおこなった。

否定的イメージの得点については、評価対象の主効果が有意であった($F(2, 654) = 107.666, p = .000$)。Holm法による多重比較の結果、「恋人がいる人」の否定的イメージ得点($M = 2.080, SD = 0.657$)が、「恋人がいないが、ほしいと思っている人」($M = 2.771, SD = 0.760$)と「恋人がおらず、ほしいと思わない人」($M = 2.776, SD = 0.882$)の否定的イメージ得点よりも有意に低かった。「恋人がいないが、ほしいと思っている人」と「恋人がおらず、ほしいと思わない人」の間には有意な差は見られなかった。したがって、否定的イメージについては、評価対象の恋人の有無によっては評価に差があったが、恋人を求める願望の有無によっては差が見られなかった。

社会性イメージについても、評価対象の主効果が有意であった($F(2, 654) = 151.338, p = .000$)。多重比較の結果、社会性イメージは「恋人がいる人」($M = 3.793, SD = 0.667$)が最も高く、次いで「恋人がいないが、ほしいと思っ

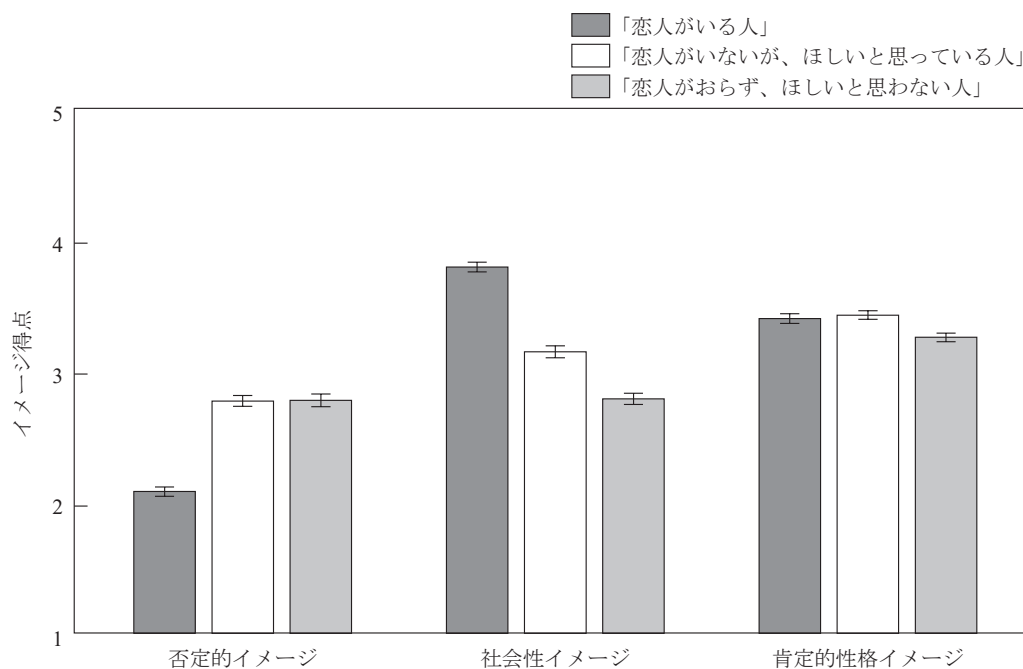


図1: 対象ごとの各イメージ得点の平均値

注: エラーバーは標準誤差。

いる人」($M = 3.146, SD = 0.835$)、「恋人がおらず、ほしいと思わない人」($M = 2.787, SD = 0.781$)の順になっていた。したがって、社会性イメージについては、評価対象の恋人の有無に加え、恋人を求める願望の有無によっても差が見られており、願望を持たない人が社会性イメージの点で最も否定的に捉えられていた。

肯定的性格イメージにおいても評価対象の主効果が有意であった ($F(2, 654) = 10.075, p = .000$)。多重比較の結果、「恋人がおらず、ほしいと思わない人」($M = 3.256, SD = 0.610$)は、「恋人がいる人」($M = 3.399, SD = 0.672$)と「恋人がいないが、ほしいと思っている人」($M = 3.426, SD = 0.610$)よりも有意に低かった。したがって、恋人を求める願望の有無による差は見られたものの、恋人の有無によっては差が見られていなかった。

ここで、回答者自身の恋人・配偶者の有無により、自身とは異なる属性の集団への評価に外集団バイアスの影響が見られる可能性について検討するため、各イメージ得点を従属変数に、評価対象の願望、回答者の恋人・配偶者の有無(3水準：恋人がいる($n = 107$)、配偶者がいる($n = 84$)、恋人も配偶者もない($n = 137$))を独立変数として分散分析を行った。しかし、どのイメージにおいても対象の願望と回答者の恋人・配偶者の有無に交互作用が見られなかった(否定的イメージ得点： $F(4, 650) = 0.997, p = .407$; 社会性イメージ得点： $F(4, 650) = 1.406, p = .231$; 肯定的性格イメージ得点： $F(4, 650) = 2.033, p = .096$)。したがって、本研究では、外集団バイアスによる影響は見られなかった。

3.2 個人差変数とステレオタイプとの関連

それぞれのイメージ得点について、「恋人がいないが、ほしいと思っている人」と「恋人がおらず、ほしいと思わない人」の得点から「恋人がいる人」の得点を減算した得点を相対的な「恋人がいないが、ほしいと思っている人」と「恋人がおらず、ほしいと思わない人」に対するステレオタイプイメージ得点とし、右翼権威主義、平等的性役割態度のそれぞれとの相関係数を求めた。その結果は表1に示した通りであり、平等的性役割態度と「恋人がおらず、ほしいと思わない人」への相対的な否定的イメージ得点との間にのみ有意な関連が見られた。男女の性役割について、伝統的な役割を支持する態度をもつほど、「恋人がおらず、ほしいと思わない人」に対して否定的なイメージを持つ傾向にあることが示された。

4. 考察

本研究では、恋愛のパートナーを求める願望の有無が、恋人を持たない人へのステレオタイプに影響するかについて検討を行った。ステレオタイプ内容モデル(Fiske et al., 2006)や、パートナーがいない人に対するステレオタイプ研究(Hertel et al., 2007; Morris & Osburn, 2016; Slonim et al., 2015; 高田・後藤, 2022)に基づき、3つの性格特性因子から検討した。結果、一部において、恋愛のパートナーである恋人を持ちたいという願望のない人が、より否定的なステレオタイプを抱かれやすいとする予測を支持する結果を得た。

最も予測と合致する形での結果が得られたのは、社会性イメージであった。社会性イメージでは、恋人のいる人に比べて恋人のいない人の方が否定的に評価されており、さらに恋人のいない人の中でも恋人を求める願望のない人が特に否定的に評価されていた。この結果は、高田・後藤(2022)とも一貫しつつ、さらに恋人を持ちたいという願望の有無が社会性のイメージに関与していることを示す結果である。恋人を持つということはその人が他者とどのように関わるかの一つの形態であることから、社会性イメージと関連しやすいと考えられる。他者との関わりという点で規範的とされる「恋人を持つ」という生き方から逸脱することが、社会性イメージの低下に関与している可能性を示唆する結果である。

肯定的性格イメージについては、恋人を求める願望の有無が関与していたが、必ずしも予測と合致する傾向ではなかった。肯定的性格イメージについては「恋人がいる人」と「恋人がいないが、ほしいと思っている人」との間には有意な差が見られなかった。恋人のいない人へのステレオタイプに着目した高田・後藤(2022)においても、恋人がいない人は恋人がいる人に比べて肯定的性格イメージでは否定的には評価されていない。また、結婚のパートナーの有無に関するステレオタイプを検討した研究においても、肯定的性格イメージと関わるような有能さに関する因子では、必ずしもパートナーのいない人が否定的に評価されるような結果は得られていない。そのため、単純に恋人がいない人が恋人がいる人に比べて肯定的性格イメージにおいて、否定的に評価されるわけではないということ、先行研究と一貫する傾向でもある。一方で、「恋人がおらず、ほしいと思わない人」は、他の対象に比べて肯定的性格イメージの側面でも否定的に評価されていた。そのため、規範的とされる生き方から逸脱することは肯定的性格イメージの側面においてもイ

表1：相対的なステレオタイプイメージ得点と個人差変数との相関係数

	「恋人がいないが、ほしいと思っている人」			「恋人がおらず、ほしいと思わない人」		
	否定的 イメージ	社会性 イメージ	肯定的性格 イメージ	否定的 イメージ	社会性 イメージ	肯定的性格 イメージ
右翼権威主義	-.039	.021	-.044	.043	.029	-.023
平等的性役割態度	.005	-.006	.020	-.120*	-.023	.033

注：* $p < .05$ 。

メージの低下に関与している可能性を示唆するものではあるが、当該イメージの低さは恋人を持たない人全般に共通するものではないため、なぜこのようなイメージの低下が見られたかについてはより詳細な検討が必要である。

また、否定的イメージについては、恋人のいない人の方が恋人のいる人に比べて否定的に評価されていたものの、恋人を求める願望の有無による差は見られなかった。恋人のいない人の方が、否定的イメージが高いことは高田・後藤（2022）で得られた結果とも一貫している。明確な恋愛のパートナーを持たないことがつまらない、孤独といったイメージと関連していることは先行研究と一貫しているものの、願望の有無との関連は見られなかったことから、規範的とされる生き方からの逸脱がステレオタイプ的なイメージの違いの要因であるとは限らない結果といえる。ただし、個人差との探索的な検討から、効果量は小さいながらも、男女の性役割について伝統的な価値観的態度をもつ人ほど、恋人を求める願望を持たない人に対して恋人がいる人よりも高い否定的イメージを持っていることを示す結果が得られた。この結果は、性役割について伝統的な態度をもつ人においては、規範的とされる生き方からの逸脱が否定的なイメージにつながりやすいことを示唆する結果である。

以上のように、社会性イメージ・肯定的性格イメージ・否定的イメージのそれぞれのイメージの因子によって、恋人の有無および恋人を求める願望の有無との関連のパターンは異なっていた。従来の研究においても、規範的とされる生き方から逸脱しているように見える対象には否定的なイメージが持たれやすいことを示す結果は報告されるもの（e.g., Iverson et al., 2020; MacInnis & Hodson, 2017）、従属変数として感情温度のような一次元評価を用いるものが多く、本研究のように評価軸によるパターンの違いを報告しているものはあまりない。今後は、個人差を含め、それぞれのイメージにおける関連のパターンの違いがなぜ生じているのかに迫ることにより、社会においてどのような生き方が“規範的”なものとして内在化されるのか、そしてなぜそうした生き方から逸脱する人が否定的に捉えられるのかを明らかにすることが必要であろう。

本研究では恋人の有無および恋人を求める願望の有無に付随するステレオタイプを検討したが、いくつかの限界点が指摘できる。まず、本研究では恋人の有無や恋人を求める願望の有無を評価者に対して明示的に示したが、実際の対人相互作用の中でこれらの属性が明示的に伝えられるとは限らない。特に、願望の有無は評価者の推測に依存する面が大きいので、本研究の知見の生態学的妥当性を考慮するためには、日常の対人相互作用の中でいかなる手がかりをもとに恋人を求める願望の有無が推測されているかも含めて検討することが必要である。また、本研究では、主観的報告によるイメージの違いについて検討を行ったが、こうしたイメージの違いが実際の対人相互作用の中でどのようなバイアスを生じさせるのかに

についても検討する必要があるだろう。例えば、友人選択や雇用などの場面において、恋人の有無や恋人を求める願望の有無がどのように評価と関連するのかが検討することは、本研究で得られた知見が対人相互作用の中で実質的な影響をもたらすかを考える上で重要だと考えられる。最後に、本調査はクラウドソーシングサイトを通じて募集したものであり、回答者は調査概要に関心を持つ人に偏っていた可能性がある。異なるサンプルにおいても結果が再現されるかという検討は、知見の一般化可能性を論じるために必要であろう。

謝辞

本研究は、第二著者の指導のもとで第一著者が滋賀県立大学人間文化科学研究科に提出した修士論文の一部について、データの再分析や加筆・修正をおこなったものである。

引用文献

- 荒牧央（2019）. 45年で日本人はどう変わったか（1）—第10回「日本人の意識調査から—」. 放送研究と調査, 69, 2-37.
- DePaulo, B. M. & Morris, W. L. (2006). The unrecognized stereotyping and discrimination against singles. *Current Directions in Psychological Science*, 15, 251-254.
- Fiske, S. T. & Neuberg, S. L. (1990). A continuum of impression formation, from category-based to individuating processes. *Advances in Experimental Social Psychology*, 23, 1-74.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., & Glick, P. (2006). Universal dimensions of social cognition: Warmth and competence. *Trends in Cognitive Sciences*, 11, 77-83.
- Hertel, J., Schütz, A., DePaulo, B. M., Morris, W. L., & Stucke, T. S. (2007). She's single, so what? How are singles perceived compared with people who are married? *ZfF-Zeitschrift für Familienforschung/Journal of Family Research*, 19, 140-158.
- Iverson, H., Lindsay, B., & MacInnis, C. C. (2020). You don't want kids?!: Exploring evaluations of those without children. *The Journal of Social Psychology*, 160, 1-15.
- MacInnis, C. C. & Hodson, G. (2017). It ain't easy eating greens: Evidence of bias toward vegetarians and vegans from both source and target. *Group Processes & Intergroup Relations*, 20, 721-744.
- Morris, W. L. & Osburn, B. K. (2016). Doyoutake this marriage? Perceived choice over marital status affects the stereotypes of single and married people. In K. Adamczyk (Ed.), *Singlehood from individual and social perspectives* (pp. 145-162). Krakow, Poland: Libron Publishing.
- 内閣府（2014）. 平成26年度「結婚・家族形成に関する意識調査」報告書（全体版）. <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h26/zentai-pdf/pdf/2-2-2-1.pdf>.（閲覧日：2020年12月7日）
- Slonim, G., Gur-Yaish, N., & Katz, R. (2015). By choice or by circumstance?: Stereotypes of and feelings about single

people. *Studia Psychologica*, 57, 35-48.

鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成. *心理学研究*, 65, 34-41.

高田咲季・後藤崇志 (2022). 大学生が「恋人がほしい」と思うことと恋人がいる人・いない人ステレオタイプとの関連. *人間文化*, 52, 28-37.

高野了太・高史明・野村理朗 (2020). 日本語版右翼権威主義尺度の作成. *心理学研究*, 91, 398-408.

山本雄大・山本潤美 (2018). シングリズムーシングルに対する否定的ステレオタイプ. *八戸学院大学紀要*, 57, 53-64.

若尾良徳 (2003). 日本の若者にみられる2つの恋愛幻想—恋人がいる人の割合の誤った推測と、恋人がいる人へのポジティブなイメージ—. *東京都立大学心理学研究*, 13, 9-16.

(受稿：2022年3月31日 受理：2022年6月3日)